



日英語「内的独白」の比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山岡, 實 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005934

日英語「内的独白」の比較

山 岡 實

はじめに

山岡（2005）では、語り手の状況把握の日英比較という観点から、池上（2000）の認知言語学的知見に基づいて、物語世界の出来事・状況を言語化する際、日本語の物語における語り手（あるいは登場人物）は、英語の物語における語り手（あるいは登場人物）よりも、「元型的な体験の構図への拘わり」の割合が高く、「主観的把握」による状況把握の傾向性が高いということを明らかにした。また、語り手（あるいは登場人物）の状況把握の認知的基盤について、日本語の物語の場合、「主観的把握」による状況把握の方が、英語の物語の場合、「客観的把握」による状況把握の方が一般的な常態であり、一定の条件次第で、それぞれ逆の状況把握の仕方が発動されることを示した。

本稿では、山岡（2005）で指摘したような語り手の状況把握の傾向性及び認知的基盤を反映して、日本語の物語における内的独白の方が、英語の物語における内的独白よりも、認知言語学的に見て、真の内的独白とも言うべき原初的性質を有するものであることを示してみる。その手順として、まず、英語の物語における内的独白がどのようなものであるのかを示してみる。次に、日本語の物語における「語り」の様式について論じ、その「語り」の様式の一つを反映する内的独白とは、どのようなものであるのかを具体例に基づいて検討してみる。そして、最後に、日英語の物語における内的独白を比較検討し、その違いを語り手の状況把握の傾向性に基づいて、検討してみる。

1 英語の物語における内的独白

ここでは、まず、Wales（1989）、Prince（1987）などに基づいて、英語の内的独白（interior monologue）とは、どのようなものかを示し、次に、英語の物語における「話法」について触れ、内的独白が「話法」の中でどのように位置付けられるのかを考えてみる。

1.1 英語の内的独白とその言語的・書記的特徴

Wales（1989：254）によれば、内的独白とは、

Interior monologue was first used in French to describe a technique in the novel for representing the direct thought processes of characters.

（フランス語で初めて用いられたもので、小説の中で登場人物の直接的思考過程を再現する技法を表す）

ものであるとする。

また、Prince（1987：44）では、内的独白とは、

The nonmediated presentation of a character's thoughts and impressions or perceptions
(登場人物の思考や印象あるいは知覚を直接的に提示したもの)

であるとする。

そして、内的独白とは、一般的に、その主要な言語的・書記的特徴として、

- ①登場人物の自己指示は、一人称代名詞で行われること
- ②動詞の基本的時制は、現在時制が用いられること
- ③報告節がないこと
- ④引用符がないこと
- ⑤語彙・統語形式の選択・言い回しは、登場人物にふさわしいものが用いられること
- ⑥シンタックスが断片的であること
- ⑦文としての名詞グループを用いること
- ⑧隠喩を用いること

などがあげられる。¹

1.2 英語の内的独白と「話法」

英語の内的独白は、これまで、Leech & Short (1981) や Quirk et al. (1985) などで見られるように、「話法」と関連づけられて論じられてきた。例えば、Leech & Short (1981) では、発話ばかりでなく思考も「話法」に含め、発話の場合、「直接話法」、「間接話法」、「自由直接話法」、「自由間接話法」、「語り手による発話行為の報告」、思考の場合、「直接思考」、「間接思考」、「自由直接思考」、「自由間接思考」、「語り手による思考行為の報告」と、それぞれ、別々の名称を付与して区別している。また、Quirk et al. (1985) では、「話法」の中に、「自由直接話法」(思考の場合にのみ用いられる)を除いて、発話ばかりでなく思考も含めているが、名称は、「直接話法」、「間接話法」、「自由間接話法」と従来のように同一の「～話法」だけを用いて分類している。このように Leech & Short (1981) 及び Quirk et al. (1985) などが分類してきた「話法」の中で、上述した内的独白の要件を満たしていると考えられるものをあげるとすると、Leech & Short (1981) の「自由直接話法」と「自由直接思考」、Quirk et al. (1985) の「自由直接話法」ということになるであろう。

ここで、Quirk et al. (1985) の「自由直接話法」と Leech & Short (1981) の「自由直接話法」、同一の「自由直接話法」という用語に注目してみよう。Quirk et al. (1985) の「自由直接話法」は、名称に「～話法」が付いているものの、思考を表出する場合にのみ使用されるもので問題ないが、Leech & Short (1981) の「自由直接話法」の場合が問題になる。Leech & Short (1981) の「自由直接話法」の文とは、次の事例(1)の文である。

(1) I'll come back here to see you again tomorrow.

この文は、一人称代名詞、現在時制が用いられ、報告節も引用符もなく、先の内的独白の要件を満たしているにもかかわらず、Leech & Short (1981) では、発話を示し、思考を再現するものではな

いとされている。それでは、この事例(1)の「自由直接話法」の文は、どのように説明すればよいのであろうか。実は、このような引用符のない「自由直接話法」の文は、後に、書かれた虚構的物語（フィクション）ばかりでなく、書かれた非虚構的物語（ニュースレポート・伝記）を分析対象とした、Leech & Short (1981) の拡大版である Semino & Short (2004) で、「自由直接思考」としてその存在を認知され直されているのである。Leech & Short (1981) の時点では、事例(1)の「自由直接話法」の文は、発話の場合にのみ使用されるとされていたが、Semino & Short (2004) で行われているように、その後の膨大な資料の調査により、「自由直接話法」の文に対する見方が変わったように思われる。Semino & Short (2004: 119) では、「引用符がないことは、発話ではなく、思考となる一助となり、「自由直接思考」の典型的な特徴である」と指摘している。引用符を省略することによって、「作家は引用できないものを引用しているという印象を減じることになる」と言う。

そうすると、英語の「話法」の中で、内的独白として上述したような主要な言語的諸特徴を有するものとは、Leech & Short (1981) での「自由直接思考」、Quirk et al. (1985) の言う「自由直接話法」、さらに Semino & Short (2004) の言う「自由直接思考」に相当するものであると言えよう。このことは、Wales (1989: 254) や Prince (1987: 44) で、いみじくも、「内的独白は自由直接思考の拡大された形式である」と指摘されていることと符合するものである。

1.3 内的独白の具体例

ここでは、内的独白の具体例として、Quirk et al. (1985: 1032-3) で示されている次の事例(2)を見てみよう。尚、斜体部の文が内的独白を示す文である。

- (2) I sat on the grass staring at the passers-by. Everybody seemed in a hurry. Why can't I have something to rush to? A fly kept buzzing around, occasionally trying to settle on me. I brushed it off. It came back. *Keep calm! Wait until it feels safe. There! Got it.* On my hand was a disgusting flattened fly, oozing blood. I wiped my hand on the grass. *Now I can relax.*

まず、事例(2)における一人称代名詞“I”に注目してみよう。英語の場合、一人称物語の“I”には、まず、二つの機能—語り手としての“I”と登場人物としての“I”—が認められる。さらに、語り手としての“I”が登場人物としての“I”の視点に移入すると、登場人物としての“I”は、その場面に遍在する意識の主体となる。この意識の主体となった登場人物としての“I”は、簡略化して言うと、意識の主体としての“I”ということになる。ここで、この一人称代名詞“I”の機能を、上の事例(2)により、具体的に見ておくと、文(a)の“I”は、語り手としての“I”が物語世界における登場人物として自分自身を“I”と客観的に対象化して表したものの、いわゆる登場人物としての“I”のことである。文(b)では、語り手としての“I”は、登場人物としての“I”の視点に移入して、意識の主体となり、意識の主体としての“I”の通行人に対する印象が語られている。内的独白を反映する文(c)でも、当然、意識の主体としての“I”が遍在しているが、文(b)ではゼロ化されていた意識の主体としての“I”は、‘Why can't I have something to rush to?’と自分自身を“I”と客体化して表している。このように、内的独白に用いられる一人称代名詞とは、意識の主体としての“I”のことを意味していることになる。

次に、斜体部の文の動詞に注目してみると、動詞が基本的に現在時制であるが、これは、登場人物の立場から見て現在であることが含意され、登場人物が自分自身の発話時点から出来事・状況を語っていることを示している。

1.4 まとめ

以上のように、英語の物語における内的独白とは、一人称物語の場合だけに生起し、意識の主体である「I」が心の中に生起している意識（思考・知覚・感情など）を「今」まさに生起しているままに語っていることばを反映する表現形式であるとする事ができる。が、ここで、注目すべきことが二つある。一つは、意識の主体としての「I」が自分自身のことと言及する場合には、「I」と客体化して示される傾向があるということである。さらに、もう一つ注目すべきことは、英語の物語では、なぜ、一人称的人物の内的独白だけが可能であるのかということである。これは、英語の内的独白は「話法」と関連付けられて考慮されてきたということに起因していると考えられる。Prince (1987) や Wales (1989) で指摘されているように、内的独白を自由直接思考の拡大したものと考えると、内的独白は直接思考というより広いコンテキストの中で、報告節と引用符が省略されたものとする事ができる。例えば、次の直接思考を示す事例(3)に対する事例(4)が自由直接思考であると考えられる。

(3) She suddenly thought: 'Am I too late?'

(4) Am I too late?

そして、この自由直接思考タイプの文が積み重ねられていくと、一人称的人物の自問自答する内的独白が形成されていくことになる。この成立状況からすると、一人称的人物の内的独白しか可能でないことも、当然のことである。

2 日本語の物語における「語り」の様式と内的独白

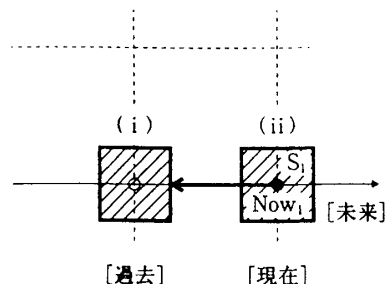
ここでは、まず、日本語の物語における「語り」の様式について論じ、次に、その「語り」の様式の一つである内的独白とはどのようなものであるのかを具体例に基づいて検討してみる。

2.1 日本語の物語における「語り」の様式

山岡 (2001) では、日本語の物語の場合、4通りの「語り」の様式が存在することを示したが、以下に、まとめると次のようになる。²

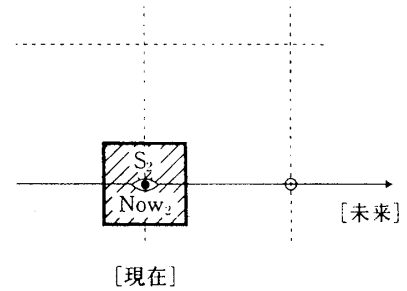
【「語り」の様式 (I)】

語り手 S_1 は、発話時点 Now_1 に存在し、その時点から、物語世界の出来事・状況を過去のものとして語ったり、その過去の出来事・状況・存在物について説明的・評価的に語る場合



【「語り」の様式 (II)】

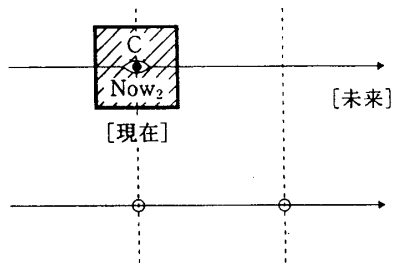
発話時点 Now_2 に移行した語り手 S_2 が、出来事・状況・存在物を物語世界の現場で目の当たりに知覚し、その知覚している出来事・状況・存在物を物語世界の発話時点 Now_2 で語る場合



【「語り」の様式 (III)】

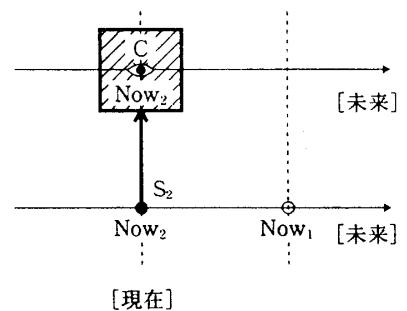
①登場人物 C は、物語世界の出来事・状況・存在物を目の当たりに知覚し、その知覚している出来事・状況・存在物について、登場人物自身が発話時点 Now_2 で語る場合

②登場人物 C は、物語世界の現場 Now_2 で体験している、あるいは体験した知覚、思考、心理状態などを、登場人物自身が発話時点 Now_2 で語る場合



【「語り」の様式 (IV)】

登場人物 C が、物語世界の現場 Now_2 で体験している、あるいは体験した知覚、思考、心理状態などを、語り手 S_2 が発話時点 Now_2 で語る場合



「語り」の様式 (I) は、日本語の物語では、通例、冒頭部分とか、段落が変わり、筋の展開を補足する語り手 S_1 の説明的部分に見られるものである。「語り」の様式 (II)・(III) は、日本語の物語を少し読んでみれば分かるように、共に、よく目にするものであるが、特に、物語のタイプにもよるが、「語り」の様式 (III) は、日本語の典型的な「語り」の様式と言ってよいほど、その使用は、顕著なものがある。「語り」の様式 (IV) は、「語り」の様式 (III) と密接に関連しており、「語り」の様式 (III) の支配する談話コンテキストに現れるものである。こう見ると、日本語の物語では、「語り」の様式 (II)・(III) が、特に、「語り」の様式 (III) が支配的であるが、実は、この「語り」の様式 (III) を反映する文が、いわゆる、内的独白のことである。

2.2 日本語の物語における内的独白

それでは、日本語の物語における内的独白とはどのようなものであろうか。ここでは、山岡 (2001) で示したものに修正、拡大したものを考えてみる。

2.2.1 内的独白の変異形

まず、内的独白の変異形は、次のように3通りに下位区分できる。

- (A) (i)登場人物が、発話時点 Now₂で、①眼前の出来事・状況を「今」まさに知覚しているものとして、②頭の中に生起していることを「今」まさに思っているものとして語る場合
(ii)登場人物が、発話時点 Now₂で、眼前の出来事・状況を「今」まさに完了したものとして語る場合
- (B) (i)登場人物が、発話時点 Now₂で、自分自身の①（物理的）行為、②知覚行為、③思考行為、④心的状態、⑤感覚を「今」まさに体験しているものとして語る場合
(ii)登場人物が、発話時点 Now₂で、自分自身の①（物理的）行為、②知覚行為、③思考行為、④心的状態、⑤感覚を「今」まさに完了したものとして語る場合
- (C) (i)登場人物が、発話時点 Now₂で、ある状況を知覚して、それについての認識を「今」まさに完了したものとして語る場合
(ii)登場人物が、発話時点 Now₂で、ある状況を知覚して、それについての判断を「今」まさに確認したものとして語る場合
(iii)登場人物が、発話時点 Now₂で、眼前の出来事・状況を知覚/思考して、それについて「今」まさにやっている①評価、②説明、③判断、④推測や「今」まさに抱いている⑤印象などを語る場合

(A)は、登場人物が、眼前で「今」まさに知覚しているもの（知覚内容）あるいは頭の中で「今」まさに思っているもの（思考内容）をそのまま直接的に語る場合である。(B)は、登場人物が、「今」まさに、自分自身、体験していること（（物理的）行為、知覚行為、思考行為など）あるいは「今」まさに体験したこと（（物理的）行為、知覚行為、思考行為など）をそのまま直接的に語る場合である。(C)は、(A)と(B)の中間的なものとして、登場人物が知覚した後の認識/判断をそのまま語ったり、登場人物が知覚/思考した後の評価/印象/推測などをそのまま語る場合である。

2.2.2 内的独白の具体例

次に、このような内的独白の変異形が、実際にどのような形で使用されているのかをいくつかの具体例で垣間見ておく。³ まず、事例(5)を詳細に見ておく。

- (5) 受話器を置き、目をあげると夜明けだった。

^(a)居間の窓へと歩み寄り、^(b)煙草に火をつける。^(c)足もとにひろがる鈍色の街の上に、雲が分厚く垂れ下がっている。

^(d)電話の向こうのすすり泣きが、耳の奥にこびりついて離れない。

^(e)額をガラスに押しあてて、^(f)暁は目を閉じた。地上をはるかに見下ろす窓は思いのほか冷たく、日に灼けた裸の上半身がみるみる粟立っていく。

^(g)あれから何年になるのだろう。^(h)生まれた町を飛び出したのが大学二年の頃—ということは、そろそろ十五年にもなるのか。⁽ⁱ⁾あれ以来、一度も家に戻ったことはなかった。^(j)戻りたいとも思わなかった。この先も二度と戻るつもりはなかった。^(k)そう、今の今までは。

^(l)「どうしたの」

^(m)ふりむくと、寝室の入り口から女がのぞいていた。

⁽ⁿ⁾一瞬、また酔っぱらって知らない女を連れこんでしまったかと思った。

(村山由佳『星々の舟』, p.9)

文(a)では、誰か分からないが、ある意識の主体が、「受話器を置き、目をあげる」という「今」まさに体験している一連の行為の後「夜明けであることに今気づいた」という現在の認識の有り様を語っていることが示されている。同様に、この同じ意識の主体が、文(b)では、「窓へと歩み寄り、煙草に火をつける」という「今」まさに体験している一連の行為を、文(c)では、「鈍色の街の上に、雲が分厚く垂れ下がっている」という窓から外を「今」まさに知覚しているものを、文(d)では、「すすり泣きが、耳の奥にこびりついて離れない」という電話での印象を、語っていることが示されている。文(e)でも前半の「額をガラスに押しあてて」までは、この意識の主体の「今」まさに体験している行為が語られているが、後半の「暁は目を閉じた」で、語り手は、これまで一体化していた意識の主体を「暁は」と主題化して（ここで初めて文(a)から文(e)の前半までの意識の主体が「暁」であったことが分かる）、「暁」から完全に遊離し、彼の行為を眺め観察している。文(f)では、語り手は、再び「暁」と一体化し、意識の主体である「暁」の「思いのほか冷たく」というガラス窓に対する感触と「みるみる粟立っていく」という体の変化していく状態が「暁」自身によって語られている。そして、文(g)から文(l)では、「暁」の「生まれた町」について「今」まさに思っているものが「暁」自身によって語られている。文(m)では、意識の主体である「暁」が、「どうしたの」という女の声を、文(n)では、「ふりむく」という「今」まさに体験している行為の後「女がのぞいていたことに今気づいた」という現在の認識の有り様を、文(o)では、「知らない女を連れこんでしまったかと思った」という「今」まさに完了した思考行為を、語っていることが示されている。

今上で見たそれぞれの物語文を、上の内的独白の変異形(A)から(C)のどのパタンに該当するかを示してみると、次のようになる。

- 文(a)―(B) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに体験している行為] + (C) (i) [登場人物自身の「今」まさに完了した認識の有り様]
- 文(b)―(B) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに体験している行為] + (B) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに体験している行為]
- 文(c)―(A) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに知覚しているもの]
- 文(d)―(C) (iii) ⑤[登場人物自身の「今」まさに抱いている印象]
- 文(e)―該当なし [語り手が登場人物「暁」の「目を閉じる」という行為が語っている「今」完了したと語っている「語り」の様式(Ⅱ)の文]
- 文(f)―(B) (i) ⑤[登場人物自身の「今」まさに抱いている感覚] + (A) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに知覚しているもの]
- 文(g)・(h)・(i)・(j)・(k)・(l)―(A) (i) ②[登場人物自身の「今」まさに思っていること]
- 文(m)―(A) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに知覚しているもの]
- 文(n)―(B) (i) ①[登場人物自身の「今」まさに体験している行為] + (C) (i) [登場人物自身の「今」まさに完了した認識の有り様]
- 文(o)―(B) (ii) ③[登場人物自身「今」まさに完了した思考行為]

その他、2.2.1の変異形パタンで、上の事例(5)に現れていないものだけをピックアップして示してみる。

(6) 幼稚園で初めて一緒になった時から、不本意ながら、萌はいつもり子の騎士役だった。それは本来、男の子が任されるべき役回りなのだろうが、何かあるとり子は必ず萌に泣き付いてきた。……

ぼんやりしていると、早くもお色直しのために花嫁退場だそうだ。今日は何回着えるつもりだろう。……さすがに今回は、これでやめておいてくれればいいのだけれど、と思う。^(a)

ふと見ると、隣の招待客の皿の上で、美しいテリーヌが無残にばらけ、海老だけが器用に隅に除かれている。^(b) い^(c)くらか非難の目を向けてから、ふっと止めた。クールな顔立ちのなかなかいい男が座っていた。

このテーブルは、り子の友人たち五人で囲んでいる。男性がふたりで、女性が三人。……

「海老お嫌いなんですか？」

声をかけると、男はちょっと照れたように頷いた。

^(d)「ええ、実はそうなんです」

笑うと、奥二重の目が温和に細くなる。

(唯川恵『肩ごしの恋人』, p.4-6)

最初の二つの文は、語り手による登場人物「萌」と「り子」の関係についての説明部分である。三番目の文から以下の文は、全て、登場人物「萌」の視点の支配する場面が描かれている。文(a)では、意識の主体である「萌」の「これでやめておいてくれればいいのだけれど、と思う」という「今」まさに体験している思考行為 (B) (i) ③) が、文(b)の前半では、「ふと見る」という「今」まさに体験している知覚行為 (B) (i) ②) が、「萌」自身によって語られている。同様に、文(c)の後半では、意識の主体である「萌」の「ふっと (目を) 止めた」という「今」まさに完了した行為 (B) (ii) ①) が、文(d)の後半では、「男はちょっと照れたように頷いた」という「今」まさに完了した「男」の行為 (A) (ii) が、「萌」自身によって語られている。

(7) 旅館の主人は信弘がそれを見るためにわざわざやって来たのだ、と考えたらしい。

なにげなく聞き流していたが、明けがた近くになって目をさました。……

起きて川岸へ向かった。まさしくよいタイミングだった。……

初めて見る現象だが、なぜか見当がついた。白い霧が膨らみきって急に走り出す。滑るように近づいて来る。身近に来て、たちまち太い竜となった。竜はかなりのスピードで走り、川面を満たして海へ向かう。

ふひゅー、と細い音を聞いた。 白い竜の吹く口笛なのかもしれない。

それにしても、なんというすさまじさ。今朝は特別のパフォーマンスを見せてくれるらしい。 川上から海の上まで太い竜が長く膨らんでうごめく。^(c)

ふひゅー、と、だれかに呼ばれたように聞こえた。

^(d)周囲に人影はない。 対岸を見た。 霧の中にだれかがいる。 土手の上を滑るように歩いている。 体を少し傾けて、霧の壁に体をそえるように傾けて ……

—— 笹子だ ——

しかし、どうしょう。橋までは …… 川下へ四、五十メートルの距離がある。

「寺西さん」と呼んだ。

(阿刀田高『おとこ坂おんな坂』, pp.325-6)

この一節は、登場人物「信弘」の視点の支配する場面に現れており、「信弘」がこの場面に遍在する

意識の主体となっている。文(a)では、「ふひゅー、と細い音を聞いた」、文(d)では、「だれかに呼ばれたように聞こえた」、文(f)では、「対岸を見た」という意識の主体である「信弘」の「今」まさに完了した知覚行為 (B) (ii) ②) が「信弘」自身によって語られている。また、文(b)では、「白い竜の吹く口笛なのかもしれない」、文(c)では、「特別のパフォーマンスを見せてくれるらしい」という意識の主体である「信弘」の「今」まさにに行っている推測 ((C) (iii) ④) を、文(e)では、「人影はない」という意識の主体である「信弘」の「今」まさにに行っている判断 ((C) (iii) ③) が「信弘」自身によって語られている。

2.2.3 まとめ

このように、日本語の物語における内的独白とは、一般化して言うと、意識の主体である登場人物が物語世界の現場で「今」まさに知覚しているもの・体験している/したことを登場人物自身が語っているもの、つまり、意識の主体である登場人物がある事態を知覚・体験すると同時に語っているものである、とすることができる。もっと言えば、意識の主体である登場人物の心の中に生起している意識（体験・知覚・思考・認識・感情など）を「今」まさに生起しているままに語っていることばを反映する表現形式であると言える。

2.3 内的独白と「語り」の様式 (IV) との関係

ここで、上で「語り」の様式 (III)、つまり、内的独白と密接に関係すると述べた「語り」の様式 (IV) に注目してみよう。

まず、次の事例(8)を見てみよう。

- (8) 片倉ハウスには勝手口がないので、どうしても正面から入らねばならない。信子は心臓が口元までこみあがってきて、そこでバクバクと音をたてているのを感じた。立ち止まり、両足で背伸びをしてなかをうかがうと、どうやら入口には誰もいない。奥でテレビがついていて、受付に椅子に座ったままそれを観ている義文の後ろ頭が見える。信子は一気に受付まで走った。

(宮部みゆき『理由』, p.608)

「語り」の様式 (IV) は、通例、内的独白が支配する談話コンテキストにおいて、語り手がそれまで一体化していた意識の主体の内面から遊離し、その意識の主体を客体化する場合に用いられる。ここで、文(a)と文(b)に注目してみよう。文(a)と文(b)とも、上で述べた「語り」の様式 (IV) の要件を満たしているが、語り手が意識の主体から遊離している度合が異なる。文(a)では、「信子は」と前文の意識の主体を主題化して、語り手は「信子」から遊離するが、そのまま「心臓が口元までこみあがってきて、そこでバクバクと音をたてているのを感じた」と「信子」の緊張した心の中の様子を語っている。一方、文(b)では、語り手は、意識の主体である「信子」を「信子は」と主題化して、「信子」から遊離し、物語世界の現場での観察者として彼女の動作を眺め観察しているものが示されている。このように、文(a)のように、登場人物の知覚・思考などが示される場合、語り手は、登場人物の内面的事態（知覚行為・思考行為）を客体化して語り、登場人物の内面から完全に遊離していないという意味で、語り手は、登場人物の内面から部分的に遊離していることになる。一方、文(b)のように、登場人物の行為が示される場合、語り手自身がその場面に遍在する意識の主体となり、物語世界の現場に居

合わせて、その登場人物の行為を眼前の出来事として語ることになる。この意味において、語り手は、意識の主体である登場人物の内面から完全に遊離していると言える。

このように、語り手は、問題の場面に遍在している意識の主体である登場人物を固有名詞によって言語化して、文頭に主題として立てることによって、意識の主体の内面から部分的に遊離したり、完全に遊離したりすることができるが、「語り」の様式(Ⅳ)を反映しているのは、当然、登場人物の知覚・思考などが示される文(a)のような場合である。文(a)のような「語り」の様式(Ⅳ)を反映する文は、語り手が登場人物の内面から部分的に遊離し、語り手の存在が若干感知できるものの、登場人物自身の内面的事態が示される点、内的独白を反映する文と密接に関連していると言える。その証拠として、文(a)の「信子は」を省略してみると、どうなるであろうか。「信子は」が省略された文は、「心臓が口元までこみあがってくる」という「今」まさに体験している行為と「バクバク音をたてているの感じた」という「今」まさに完了した知覚行為が意識の主体である「信子」の内的独白という形で表されることになる。この両方の言語現象が同一のコンテキストに現れている次の事例(9)を見てみよう。

(9) 真実を隠しているのは辛い。隠したまま幸せを掴んだところで、本当の幸福感は得られないだろう。一生自責の念を抱えて過ごさねばならず、気持ちが安らぐこともないに違いない。しかしそれに耐えることが、せめてもの償いなのかもしれないと靖子は思った。^(a)

指輪を薬指に通してみた。ダイヤは美しかった。心に曇りを持たぬまま工藤のもとへ飛び込んでいけたらどんなに幸せだろうと思った。^(b)だがそれは叶わぬ夢だ。

(東野圭吾『容疑者Xの献身』, p.341)

文(a)は、意識の主体である「靖子」が主題化され、文頭に固有名詞として現れている場合で、登場人物「靖子」の「今」まさに完了した思考行為が語り手により客観的に語られたものである。文(b)は、「靖子は」が省略された場合で、「工藤のもとへ飛び込んでいけたらどんなに幸せだろうと思った」という「今」まさに完了した思考行為が意識の主体である「靖子」の内的独白という形で表されている。従って、「語り」の様式(Ⅳ)を反映する文は、野口(1980)に倣って言えば、半内的独白と言ってよいであろう。⁴

因みに、事例(8)の文(b)は、「語り」の様式(Ⅱ)を反映する文であるが、「信子は」が省略されると、文(a)と同様に、「一気に受付まで走った」という「今」まさに完了した行為が意識の主体である「信子」の内的独白という形で表されることになる。

以上のように、「語り」の様式(Ⅳ)が半内的独白であり、「語り」の様式(Ⅱ)も、物語世界の現場にいる語り手が眼前の出来事・状況を・存在物を知覚・体験すると同時に語っているものという点、語り手の内的独白とも言えるので、この「語り」の様式(Ⅱ)も含めると、日本語の物語は、内的独白スタイルの物語文で埋め尽くされていると言ってよいであろう。

2.4 一人称物語の内的独白について

これまで、説明の便宜上、日本語の三人称物語のことについてのみ触れてきたが、ここでは、一人称物語の内的独白について考えてみる。

まず、次の一人称物語の事例(10)を見てみよう。

(10) 午後、地下鉄で日比谷へ向かっていると、また一つ手前の霞ヶ関駅で電車が動かなくなりました。乗る車輛も立つ場所も毎日同じなので、ガラス窓の向こうには必ず日本臓器移植ネットワークの広告看板が見える。なんとなく、また彼女が背後に立っているような気がして振り返ると、そこには薄いスプリングコートの下に桃色の看護衣を着た十五、六歳の女の子が、奇妙なリズムで頭を揺らしながら立っていた。

電車の空調が戻り、ベルが鳴ってドアが閉まった。移植ネットワークの広告がゆっくりと窓の外を流れてゆく。ガラス窓には相変わらず奇妙なリズムで頭を振っている偽看護婦少女の姿が映っていた。

(吉田修一『パーク・ライフ』, pp.79-80)

ここでも、2.2で分析した三人称物語の場合と同様なことが言える。最初の説明的な文を除いて、二番目の文から以下の文は、ある意識の主体が物語世界の現場で「今」まさに知覚しているもの・体験している/したことを意識の主体自身が語っているもの、つまり、内的独白を反映する文である。そして、読み進んでいくと、

(11) 「こんにちは」

彼女が声をかけても、男は気球を見上げたままピクリとも動かなかった。ぼくの脇腹を突つた彼女が、「あなたも声かけてよ」と小声で非難する。

(吉田修一『パーク・ライフ』, p.82)

と、この箇所ですべてこの意識の主体が「ぼく」であることが、さらに、この物語が一人称物語であることが判明する。

日本語の物語では、一人称物語であれ、三人称物語であれ、共に、ある一人の登場人物（主人公）の意識が物語全体を支配しているのが通例であり、一人称物語の場合、その意識の主体が「私（ぼく）」であり、三人称物語の場合、固有名詞の指示する人物であるにすぎない。従って、日本語における一人称物語と三人称物語の差異は、語り手が、同一の物語全体を支配している意識の主体を、「私（ぼく）」として主題化するか、⁵ 特に「私（ぼく）」以外の主人公の人称性を強調するため、「固有名詞」の指示する人物として主題化するかの違いである。

2.5 まとめ

このように、日本語の物語における内的独白というのは、一人称物語、三人称物語を問わず、意識の主体である登場人物が心の中に生起している意識（体験・知覚・思考・認識・感情など）を「今」まさに生起しているままに語っているものを反映するものであるとすることができる。この「語っているもの」というのは、有声の語りではなく、心の中で語っている無声の語り、いわば、心の中で呟いていることばのことで、登場人物が「今」まさに知覚・体験すると同時に心の中で呟いていることばを表していると言える。

3 日英語の物語における内的独白の比較と真の内的独白

しかしながら、既に見てきたように、英語の物語における内的独白と日本語の物語における内的独白は、同じ内的独白という用語を用いているが、類似点は見られるものの、何か違ったもののように

感じられる。ここでは、両者を比較検討し、その違いを日英語物語における語り手の状況把握の傾向性—「主観的把握」による状況把握の傾向性が高いか、「客観的把握」による状況把握の傾向性が高いかということ—に基づいて、検討してみる。そして、日本語の物語における内的独白の方が、認知言語学的に見て、真の内的独白とも言うべきものであることを示してみる。

3.1 日英語物語における内的独白の違いと語り手の状況把握の傾向性

ここで、もう一度、日英語、それぞれの言語の物語における内的独白とは、どのようなものであるかを整理しておこう。英語の物語における内的独白とは、一人称物語の場合だけに生起し、意識の主体である“I”が心の中に生起している意識を「今」まさに生起しているままに語っていることばを反映する表現形式である。一方、日本語の物語における内的独白とは、一人称物語、三人称物語を問わず、意識の主体である登場人物が心の中に生起している意識を「今」まさに生起しているままに語っていることばを反映するものである。この日英語の物語における内的独白を比較してすぐ疑問に思うことは、日本語の場合、一人称的人物と三人称的人物の内的独白が、共に、可能であるが、英語の場合、なぜ、一人称的人物の内的独白は可能であるが、三人称的人物の内的独白は存在しないのであろうか、(あるいは、問題にならないのであろうか、)ということである。

山岡(2005:140-1)で指摘したように、日本語の物語の場合、一般的に、問題の場面に遍在している意識の主体である登場人物がゼロ化されたり、テンス現在の「ル」形が用いられる傾向にあり、「主観的把握」を裏付ける標識(A)(話し手が〈いま〉、〈ここ〉で直接体験している「身体を介しての直接性」を反映しているかどうかということ)と(B)(話し手自身が認識の原点としてゼロ化されているかどうかということ)を示す度合が高く、「主観的把握」による状況把握に基づいて言語化される傾向がある。一方、英語の物語の場合、登場人物の「主観的把握」による状況把握が見られる場合でも、意識の主体である登場人物を人称代名詞を用いて客体化したり、登場人物の直接体験を過去時制を用いて客観的に描くなど、語り手の「客観的把握」による状況把握の傾向性が見られる。すなわち、これは、日英語の物語における語り手の状況把握の認知的基盤が異なっているということを意味する。日本語の物語の場合、「主観的把握」による状況把握の方が、英語の物語の場合、「客観的把握」による状況把握の方が、一般的な常態である、ということである。但し、この語り手の状況把握は、ただ傾向性があるということで、当然、一定の条件次第で、それぞれ逆の状況把握の仕方が発動されることになる。

これまでみてきた事例から明らかなように、日本語の物語における内的独白では、一人称物語であれ、三人称物語であれ、登場人物は、認識の原点としてゼロ化されたり、テンス現在の「ル」形により意識の主体である登場人物が直接〈いま〉、〈ここ〉で知覚・体験している「身体を介しての直接性」が示されたりする。一方、英語の物語における内的独白では、現在時制が用いられ、意識の主体である“I”の「今」まさに生起している意識が示されるが、問題の場面に遍在する意識の主体は、〈ゼロ〉として表示されずに人称代名詞“I”として出現し、語り手が、その分、意識の主体を客体化していることが示される。

まさに、この日英語物語における内的独白の違いは、先の日英語物語における語り手の状況把握の一般的傾向を反映しており、日本語の物語の場合、語り手の主観的な状況把握に基づき、一人称的人物の内的独白、三人称的人物の内的独白、両方とも可能になる。日本語の物語の場合、通例、語り手は登場人物と一体化していて、登場人物が意識の主体として問題の場面に遍在している。従って、意

識の主体である登場人物は、通例、認識の原点としてゼロ化されていて、言語表現上は姿が現れない。意識の主体である登場人物が、文頭に固有名詞（あるいは「彼」、「私」などの人称名詞）として現れる場合があるが、これは、「客観的把握」による状況把握の仕方が発動され、語り手が、何らかの理由で、⁶ 一体化していた意識の主体である登場人物の内面から遊離する場合である。

一方、英語の物語の場合、語り手の客観的な状況把握の傾向性を反映して、一人称的人物の内的独白ですら、意識の主体を“I”として客観的に表現せざるを得ない。ましてや、三人称的人物の内的独白と言うことになると、語り手の客観的な状況把握に基づき、意識の主体である登場人物には三人称代名詞が用いられ、直接体験には過去時制が用いられることになり、その存在が怪しくなる。これらの三人称代名詞と過去時制の存在は、上で見た「主観的把握」を裏付ける標識(A)と(B)に抵触することになり、三人称的人物の内的独白の出現を妨げる決定的要因となる。

3.2 英語の三人称物語における内的独白

英語の物語の場合、内的独白は、以上のように、一人称物語において現れる表現形式であるとされるが、現実には、三人称物語においても見られることがある。が、三人称物語の場合、三人称・過去時制の枠組みによる制約のため、当然のことながら、上述した内的独白の言語的特徴、一人称代名詞・現在時制とは相容れない。

それでは、英語の三人称物語の場合、内的独白を実現するための方法として、どのような方法が取られるのであろうか。一般的には、上で述べた三人称的人物の内的独白の出現を妨げる決定的要因となる三人称代名詞及び過去時制という言語的特徴を消去する方法が取られる。三人称代名詞を消去するということは、語り手が三人称代名詞の指示する登場人物を客観的に対象化することをやめ、その登場人物の視点に移入して、自らは姿を消し、その登場人物が問題の場面に遍在する意識の主体（言語的には表現されないが）になることを意味する。従って、当該の表現形式によって表される出来事・状況は、その意識の主体である登場人物の視点から見たものあるいはその登場人物の意識の支配するものとなる。また、過去時制を消去するということは、語り手が登場人物の発話時点に移動して、自らは姿を消し、その登場人物自身が当該の表現形式によって示される出来事・状況の語り手になることを意味する。

このように、三人称代名詞及び過去時制を消去するということは、語り手が登場人物の視点に移入して一体化すると共に発話時点も登場人物のそれに移動することを意味し、両方の言語的特徴が消去された表現形式は、登場人物が知覚・体験していることを登場人物自身が語っているものを表すことになる。つまり、日本語の物語における内的独白と同様に、登場人物が知覚・体験すると同時に心の中で呟いていることばを表すことになる。しかしながら、ここで注意すべき点は、三人称物語の内的独白は、懸垂分詞や「NP+V-ing」句などの表現形式を取り、三人称物語の一部、しかも、文と文との間あるいは句と句の間における限定されたごく細部にしか見られないということである。⁷

英語の三人称物語の場合、日本語の物語の場合のように、全く純粹な意味において語り手の登場人物の視点への移入と発話時点への移動が同時に行われるということは、語り手の「客観的把握」による状況把握の傾向性の高い言語として極めて稀なことで、何らかの形で語り手の物語る声が聞こえる。語り手による客観性をいかに払拭しようとしても、それは至難のわざであり、内的独白の可能性の範囲も極めて限られた局所的なものとなると言えよう。しかしながら、逆に言うと、この三人称物語の内的独白は「客観的把握」による状況把握の方が一般的常態である英語の物語において、「主観的把握」

による状況把握の仕方が発動された貴重な事例の一つと言える。


3.3 真の内的独白とは

日本語の物語の場合、語り手の状況把握の認知的基盤は、「主観的把握」による状況把握の方が常態であり、日本語の物語における内的独白では、一人称的人物ばかりでなく、三人称的人物も認識の原点としてゼロ化され、またテンス現在の「ル」形により、一人称的人物・三人称的人物の心の中に「今」まさに生起している意識が反映されている。一方、英語の物語の場合、語り手の状況把握の認知的基盤は、「客観的把握」による状況把握が常態であり、この状況把握の傾向性を反映し、一人称的人物の内的独白でさえ、意識の主体は“I”として客体化して表現される。ましてや、三人称的人物の内的独白は、存在するとしても、極めて限定された局所的なものとなる。意識の主体である登場人物（言語表現として姿を現さない）の心の中で切れ目なく連続して起こる意識の内的な直接の姿を、〈いま〉、〈ここ〉で生起しているまま言語に転じたものを真の内的独白とすると、日本語の物語における内的独白の方が、一人称物語の場合であれ、三人称物語の場合であれ、英語の物語における内的独白よりも、この真の内的独白をより忠実に反映した表現形式であると言える。

しかしながら、英語の三人称物語の場合、上記のような語り手の状況把握による限界を克服し、内的独白の欠如を補足するという形で、いわば代用されてきたのが、いわゆる「自由間接話法」である。英語の物語における「自由間接話法」は、一方では、登場人物が「今」まさに心の中で思考・体験していることを提示し、他方では、三人称代名詞（登場人物を指示する）と過去時制を通して、同時に語り手の声が聞こえてくるものである。つまり、英語の物語における「自由間接話法」とは、登場人物の「視点」と語り手の「物語る声」が並存するもので、登場人物が物語世界の現場で思考・体験していることを、語り手が物語世界外の発話時点から語っているものと規定することができる。英語の物語における語り手の認知的基盤である「客観的把握」による状況把握に基づいて、登場人物の心の中に生起している意識の直接的姿を最大限に再現しようとしたのがこの「自由間接話法」であると言える。

逆に言うと、日本語の物語には、真の内的独白とも言うべき、語り手の「主観的把握」による状況把握の傾向性を極めて色濃く反映する内的独白が存在するので、この英語流の内的独白の代用版である「自由間接話法」は、日本語には必要がないし、理論上、存在し得ないものである。このように、日本語という言語は、人間の心の中に「今」まさに生起している意識をそのまま生の姿で表出できるという点で、「主観的把握」による状況把握を如実に反映した世界でも類い希なる言語の一つであると言っても過言ではないであろう。

[注]

- 1 詳細については、Chatman (1978 : 182-3)、Prince (1987 : 44)、Wales (1989 : 190, 254-5)を参照。
- 2 以下の図における記号の説明をしておく。Now₁ → 物語世界外の「今」(発話時点) / Now₂ → 物語世界内の「今」(発話時点) / S₁ → 発話時点 Now₁に存在する語り手 / S₂ → 発話時点 Now₂に存在する語り手 / ● → 語り手S₁の観点 /  → 語り手S₂及び登場人物Cの視点 / □ → 語り手S₁・S₂及び登場人物Cの言表行為 / 下の実線 → 語り手S₁・S₂の時間軸 / 上の実線 → 登場人物Cの時間軸

- 3 尚、以下の具体例には、上の内的独白の変異形は、全て現れていないが、他の事例で確認されている。また、上記以外の変異形も存在するものと思われる。今後の更なる調査が必要である。
- 4 野口（1980：130）では、この「語り」の様式（IV）を反映する文と同種の文（二葉亭四迷の『浮雲』の一文：「どうも気が知れぬ、文三には平気で澄ましてゐるお勢の心意気が呑めぬ」）を「半独白体」の文と呼んでいる。本稿では、野口（1980）で言う「独白」を「内的独白」と呼んでいるので、以下では、この種の文を「半内的独白」の文と呼ぶことにする。

尚、この種の文を西欧語の物語における用語を用いて「自由間接話法」と呼ぶ向きもいるが、野口（1980：130）で指摘されているように、「西欧の文芸批評家だったら、これを自由間接話体（die erlebte Rede）と呼ぶだろう。しかし、厳密な人称の範疇を持たない日本語の場合、この用語を機械的にあてはめるのはためらわれる。」この種の文では、確かに、文頭に固有名詞（あるいは人称代名詞）が用いられ、客観性を示す要素が見られるものの、基本的には、内的独白調の文であるとする方がよい。ほぼ周囲が内的独白の文に包まれている中で、その場面に遍在する意識の主体が、時々、何らかの理由で、客体化され、固有名詞（あるいは人称代名詞）で示されるのである。もう一つ、西欧語の「自由間接話法」と決定的に異なる点がある。日本語のこの「半内的独白」では、登場人物のあくまでも「今」まさに心の中に生起している事態が示されるが、西欧語の「自由間接話法」では、過去時制を通して微妙な時間的・空間的距離を置いた過去の事態（登場人物から見れば現在の）が描出される。英語の場合を含めて、西欧語の物語における「自由間接話法」は、三人称代名詞と過去時制を両方とも用いて、適度に語り手と登場人物の空間的・時間的距離を調節し、客観性を保ちつつ登場人物の内面を描写することにより、独特の微妙な味を醸し出そうとするものである。この種の文では、語り手が登場人物の内面から部分的に遊離し、100%の内的独白とは言えないまでも、意識の主体である登場人物自身の「今」まさに心の中に生起していることが示されている点、まさに「半内的独白」と呼ぶのが適切である。

- 5 とは言うものの、この「私（ぼく）」は、三人称物語における固有名詞（あるいは人称代名詞）や英語の内的独白で用いられる意識の主体としての“I”とは、語り手による客体化の度合いが異なる。日本語の内的独白における「私（ぼく）」は、渡辺（2002：166）で指摘されているように、「三人称「彼」と同じレベルのもの、言語表現する自分（言表主体）と切り離された、対象化されたレベルのものとして扱う」ことは難しく、「言表主体の気持ちや評価を濃厚に表現することを好む日本語の場合、「私」を「彼」と同次元に対象化することは至難な業に属する。」また、「私小説の「私」は、言表主体と濃厚に重なる一人称であり、言表主体自身だという顔付きをした「私」である」としていることから、一般的な小説（物語）における「私（ぼく）」は、この「私小説」の影響を多分に受けているものと考えられる。一方、「「私」を、言表主体から切り離された対象として語る事が可能となる」のは、「夢に自分自身を登場させる」場合や「回顧の中の夢想内容の一部分」に現れる場合であるとする。さらに、付け加えると、説明的談話に生起する「私（ぼく）」も、自分自身を客体化して見ることになるだろう。いずれにしても、内的独白に現れる「私（ぼく）」は、まさに、ある意識の主体が問題の場面で「今」まさに無意識裡に発したものとして、三人称物語における固有名詞（あるいは人称代名詞）よりも、ましてや英語の意識の主体としての“I”よりも、語り手による客体化の度合いが極めて低い表現であることは間違いないであろう。
- 6 その理由の一つとして、特定の主人公の物語であることを時々読者に想起させなければならないということが考えられる。意識の主体である主人公が、三人称物語の場合であるなら、固有名詞

の示す人物であることを、一人称物語の場合であるなら、「私」であることを、読者に想起させるために、時々、それぞれ、固有名詞あるいは人称名詞「私」を挿入しなければならないのである。特に、三人称物語の文は、翻訳調の文体を有する文であり、その根底には一人称物語の構造が流れており、例えば、事例(5)の場合であるなら、登場人物「暁」を時々挿入しないと「私」の一人称物語になってしまう。しかしながら、一人称物語の場合、開高（1986：248）で「"私"という単語をぬいて私を描くのがわが国固有の文章作法であった。古典小説、和歌、俳句、ことごとくそうである」ように、主人公「私」という人称名詞が全く現れない物語（開高健（1986：『夜と陽炎』）も可能となる。

7 詳細については、山岡（1990）を参照。

例文の出典

- 阿刀田高『おとこ坂おんな坂』 毎日新聞社, 2006.
東野圭吾『容疑者Xの献身』 文藝春秋, 2005.
宮部みゆき『理由』 新潮社, 2004.
村山由佳『星々の舟』 文藝春秋, 2003.
唯川恵『肩ごしの恋人』 マガジンハウス, 2001.
吉田修一『パーク・ライフ』 文藝春秋, 2002.

参考文献

- Chatman, S. 1978. *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*. Cornell University Press.
- Leech, G.N. and M.H. Short. 1981. *Style in Fiction*. Longman. (寛壽雄監修『小説の文体—英米小説への言語学的アプローチ』 研究社, 2003)
- Prince, G. 1987. *A Dictionary of Narratology*. University of Nebraska Press. (遠藤健一訳『物語論辞典』 松柏社, 1991)
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Semino, E. and M. Short. 2004. *Corpus Stylistics: Speech, Writing and Thought Presentation in a Corpus of English Writing*. Routledge.
- Wales, K. 1989. *A Dictionary of Stylistics*. Longman. (豊田昌倫他訳『英語文体論辞典』 三省堂, 2000)
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』 講談社.
- 開高健. 1986. 『夜と陽炎』 新潮社.
- 山岡實. 1990. 「内的独白の実現方法について—三人称物語の場合—」大阪府立大学英米文学研究会『英米文学』 38, 65-82.
- 山岡實. 2001. 『「語り」の記号論—日英比較物語文分析』 松柏社.
- 山岡實. 2004. 「物語と認知言語学—語り手の状況把握の日英比較—」『言語と文化』 大阪府立大学言語センター, 第3号, 101-10.

- 山岡實. 2005. 『分詞句の談話分析—意識の表現技法としての考察—』 英宝社.
渡辺実. 2002. 『国語意味論』 塙書房.

A Comparison of 'Interior Monologues' in Japanese and English Narratives

Minoru Yamaoka

In this paper, I reveal that interior monologues in Japanese narratives have a more primitive nature that should be called a genuine interior monologue than those of English narratives, reflecting the tendency of the narrator's construing the situation in the narrative world and the cognitive basis of his construal. As the procedure, I first show what kind of things interior monologues in English or Japanese narratives are, based on specific examples. Then, by comparing the two, I investigate their difference on the basis of the tendency of the narrator's construal.